
チートオリ主のナデシコ生活

朽葉 周

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートオリ主のナデシコ生活

【NZコード】

N5721X

【作者名】

朽葉 周

【あらすじ】

SFっぽい世界観で火星に生まれたと思ったら、地球と敵対して核攻撃された。な、何を言ってるよ。機動戦艦ナデシコの世界にTS転生したオリ主が二ワ力原作知識とご都合主義の補正をしつて適当に生きていくお話。

転生チート、といつのがある。

転生チート。簡単に言つと、前世の知識を持ったまま転生 新しい人生を得る、と言うものだ。元々転生という言葉自体仏教用語で正しい用法ではなく、コレは一種のネットスラングと言つやつだ。主にネット上の二次創作活動などで使われていたりする。

で、何故俺が冒頭からこんな切り出しをしているかと言つと、まあネットの二次創作ではよくありがちな展開なのだが、どうやら俺はその転生と言つものをやらかしてしまったらしい。

考へても見て欲しい。朝何時ものように起きようとしたら体が動かず、声を上げようとするとその全てが泣き声になってしまふのだ。で、その内見知らぬ美女が慌てて飛び寄り、おもむろに此方に乳房を寄せて と、そんなノリなのだ。

うん、まさか俺がこんな良くある一次創作みたいな展開に巻き込まれるとは思わなかつた。

だが、あえて言わせて貰おう。「どんな羞恥プレイだ」と、「役得」の一言を。

さて、そんな俺なのだが、どうやら今生は女性としての生を得たらしい。何故らしい、などと言う不明瞭な言い方かと言つと、いまだに自分が女性として生を受けたという事実を幾分か受け入れられないという点が大きいのではないだろうか。

いや、な。こう、数十年男として生きてきた記憶があるのに、ある日突然女の赤子として転生したのだ。当然違和感はある。といってもまあ、今年で俺も六歳。そろそろこの肉体に感じる違和感と言つのも小さくなつてきている。

肉体に魂が引っ張られる、と言つやつなのだろう。嘗ての厨一病で得た痛々しい知識が火を噴く。

段々と女性としての自分に違和感が無くなつていいく。その事を自覚して、恐怖半分諦め半分。何せ今の俺が女性と言う事実は如何足搔こうが覆らない。女兒としての生を受けたのだから、コレもまた必然かと、そう考え諦めた。

然し、問題はこの世界だ。22世紀初頭らしいのだけれども、なぜか俺は火星の大地に立つてゐる。そう、俺は火星生まれの人間なのだ。

うん、火星生まれ。意味が解らない。これがどこぞの魔法溢れるファンタジーな世界だと、現代の裏側に潜む闇だと、そういう類ならまだわかる。

が、火星ってなんだ。

私は良くある「胡散臭い神様と契約して」、という類の転生ではなく、単純にこの異世界に転生してしまったタイプの人間だ。もしかするところこの世界は、単純に前世の直縁上にある世界なのかもしれない。何せ母星が地球で暦が西暦なのだ。

いやしかし。嘗て私が生きていたのが21世紀初頭。ソレに対して今現在は22世紀初頭。たかが100年未満の間に、火星にテラフォーミングを施せるほど、人類の技術と言うのは爆発的に進歩する物だろうか？まあ、嘗てのPC普及を見ていればソレもありえないとはいえないのだけれども、流石にコレは規模が違うだろう。このトンデモ進歩具合から考えて、流石に嘗ての直縁ではないと考える。

では、展開的には何等かの娯楽作品系の世界にでも生まれたのだろうか。然しその場合、俺はあまり知識を持つていない。アーサー・C・クラークの作品なんて読んだ事もないし。

さて、だとするとこの世界は難だろうか。俺の持ちうる知識で、火星が舞台と成った作品とは……機動戦士な種死の外伝とか？後はフロムなソフトウェアの出してるソフトとか。その位しか思い浮かばないな。

で、仕方が無いので、とりあえず情報収集と両親の話にこつそりと耳を立てることにした。どうも我が家の両親はかなり良心的な御仁らしく、子供の前では滅多に政治的な話はしないのだ。

で、夜、こつそりと両親の会話に耳を立てていたのだが……。

「どうも連合政府め、我々を月から追い立てただけでは飽き足らず、この火星の地にまで手を伸ばそうとしているらしい」

「アナタ……」

「時雨、近いうちに此処も戦場になるやもしかん。そのときは吹雪をつれ、急ぎ避難船に逃げるのだぞ」

「はい……でも、アナタも無理はなさらないで」

「ああ……」

と、その後はおアツいシーンとなってしまったので、元の私に『えられた寝室へと踵を返した。

さて、判明した事実を纏めると、

- 1・元々両親は月に住んでいたらしい。
- 2・すつたもんだの末、月を追い出されて火星に移住したらしい。
- 3・で、どうやら敵である連邦とやらは、此処に対する攻撃を狙っているらしい。

……あれ？ この状況、何か知ってるような？？

うん、なんだつたか、この状況。確か、ゲームじゃなくて、アニメ

……うん？

月の独立戦争で敗北して、火星に移住、で、核を打ち込まれて木星

……っ！？

まさか、真逆真逆、この世界はもしかして、
「機動戦艦ナデシコ」
の世界なの……か？

俺この世界二ワカだよ！？

00 幼女、大地に立てない（後書き）

カツとなつて書いていたらある程度溜まってきたので掲載

01 極寒、酷寒、増感、何とかカンつて書くとHiroi。 ああ、極冠遺跡ね。

と言つわけで、どうやらこの世界は機動戦艦ナデシコの世界に間違いないらしいです。ナンテコッタイ。

俺の覚えていいる二ワ力知識が確かなら、この後火星には核弾頭が打ち込まれるはずなのだ。

まあ、だからといってソレを私に如何こうする事は出来ない。何せ私はただの子供。子供が「核弾頭が打ち込まれる」なんぞ言おうものなら、間違いなくその両親は私を病院へ連れ込むか、周囲に不安な情報を流布する怪しい存在が居ないかを調査するだろ。間違いなく病院に連れ込まれて隔離。

で、為らば俺に何が出来るのかと言つと、後顧の憂いを絶つことくらいしか、私がこの世界に出来ることなんていうものは思い浮かばない。

幸いと言つが「都合主義」と言つべきか、俺の住むコロニーは現在火星の極冠に程近い。乗用車で移動すればほんの少しの時間で極冠にたどり着くことも出来るだろ。

いや、遺跡を発見できるか、と問われれば、ワカラナイとしか言い様が無い。

然し、コレでも俺は現実来訪方の転生者、と言つジャンルに属する人間だ。多少のご都合主義くらいは神も御目溢しをくれるのではないだろうか、などと軽く考えて。

とりあえずとばかり、その日の晩の内に早速盗んだ小型乗用車で極冠へ向けて走り出した。

何せ私は火星生まれの六歳児。原作で木連がどれ程の月日を火星で過したかは明言されていなかつたように思うのだが、流石に6年も戦争状態を維持し続けるというのは考え難い。戦争つて継続するだけで結構お金掛かるからね。

つまり如何いう事がと言つと、痺れを切らせた連合が何時核を打ち込んできてもおかしくない、という事だ。

私も一応火星生まれ。出来るなら、演算装置を何処か遠い宇宙にジャンプさせるか、もしくは破壊、出来ずとも装置その物を寄り見つかりにくい状態にする、などの手段が考えられる。

といつても、俺に出来る破壊手段なんて、考えられるのはこの乗用車を特攻させるくらいしか考え付かないのだけれども。

で、今現在直感にしたがつて適当に火星の大地をドライブしている。乗用車はお隣さんの物を拝借した。お隣さんの長男は自らパワーローダーを作る趣味の人で、この乗用車も当然彼の魔改造が施されている。なに、未だ幼女であるこの身だが、嘗て軍の放出品のバギーに乗つっていた俺からすれば、魔改造品とはいえ、電気式のエレカなんぞ玩具に過ぎん。例えソレを操るのが幼女の身であろうとも、な。とか考えながら乗用車を走らせていたのだが、なにやら微妙に計器類が狂いだす地点があることに気付いた。前世から現世に転生した身としては、現世の進んだ科学には大変興味を引かれる。そんな俺だからこそ、私物として多くの携行機器を身につけている。そのうちの幾つかが、磁場の異常や磁気嵐、様々な電磁波の異常を訴えていたのだ。

真逆早速アタリかと冷や汗をかきつつ、直感に従い更に乗用車を飛ばす。と、その内可視光すら狂い出すという有様。余りにもあんまりなこの事態に、思わず溜息が零れるのは罪ではなかろう。いや、確かにこ都合主義を望んだのはこの俺だ。だが、なあ……。幾らなんでも、コレはないだろつ。

目前には、氷付けの地面から突き出す肌色っぽい尖った何か。厭さ、確かに演算ユニットつて火星の極冠で凍り付いて埋まつてたんじゃなかつたつけ？ 何でこんなところに一部露出してるんだ？ いや、俺の目的からすれば、コレに少し土なり氷なりをかぶせて見つけにくくするだけで済む筈だ。そう、此処に何かがある、という

事にさえ気付かなければ、誰が好き好んで極冠の凍りついた大地の下なんぞ好き好んで調べるというのか。

小さく頷いて、早速と取り出したるは、宇宙用の作業ポッドなどに使われる簡易燃料缶と、父親から護身用として渡されている小型のデリンジャーーレーザー。コレをこの露出した演算ユニットにぶつければ、いくらかの爆発を起こせるはず。そうなれば、その影響で演算ユニットは更なる氷雪に覆われ、遠く発見される機会は遠退く筈……。

うん、ボソンジャンプとか言う技術は遠のくが、まあ遠い未来に起ころでであろう大量虐殺の所以が一つでも減れば、もしかすると未来は少しでも良くなるのかもしれない。

「悪いが、貴様には人類の為沈んでもらう。……悪く思うな」

そう呟いて、何と無くその角をペチンと叩いた。

……どうも、あつせりとソレが見つかったことに気が緩んでいたらしい。

突如として幾何学模様に輝きだしたその演算ユニットの端。その光は急速に輝きを増し、気付けば実体のない引力を発しだしていく。

「ぬあつ！？ 不覚！！」

必死に抗おうとするも、抵抗空しく、俺の躯は演算ユニットの角つこの発する強力な引力に引かれるがままその傍へと引き寄せられて。

「つて、何いつ！？ か、身体がつ！？」

なんじゃそりやと思わず叫ぶ。遺跡の演算ユニットの発する白い光。その、光の濃い部分が俺に触れた途端、俺の躯のその部分が痛みも無く消滅……いや、分解されたのだ。

コレにはさすがの俺もかなり焦る。何しろ、俺の知る限り、ボソンジャンプと言うものはこんな徐々に身体が消えるような飛び方はしないはずだ。若干のタイムラグが存在するとは言うが、ソレも精々一秒未満といったレベルのはず。しかも私は今現在、ボソンジャンプに必須であるチューリップ・クリスタルという触媒すら所持していないのだ。

……厭待て、チユーリップ・クリスタル……CCと言つものは、確かに極冠遺跡の組成を人工的に再現した物、だったか。だとすれば、此処には遺跡そのものが有るわけで……。

ちょ、おま、洒落にならん！！

慌てて身体を引き剥がそうとするのだが、どうにも遺跡の持つ引力は洒落にならないレベルで、如何足搔こうと俺の軀がその角から離れる事は無く。

徐々に光に浸食されて消え逝く身体。真逆この様な終わりを迎えるとは、流石に想像だにしなかった。

思わずほろりと涙を流して、次の人生を想つて目を閉じたのだった。

つまりは、俺はどうやら生き延びたらしい。いや、正確には死んで、別の存在として再誕したというか。俺にもなんとも説明し難い。と言うのも、今さつき気付いた私の中にある奇妙な知識と記憶。口レガ、私がオリジナルの私でないという証拠になるらしい。

順番に語ろう。

先ず私が遺跡に触れた後のこと。あの光に飲み込まれた私は、どうやらボソンジャンプを行つたというよりは、演算ユニットに飲み込まれてしまったらしい。

演算ユニットとは言つものの、あれは単なる演算装置と言うだけではなく、周囲の環境情報の計測やら、様々な情報を常に取り込んで記録したりもしているのだそうだ。知らんけど。で、その収集記録の一環として、「人類」のサンプルを取つた、と言つことらしい。で、サンプルとして採取されてしまった私なのだが、どうやらここでもご都合主義が発生したらしい。

どうやら俺は如何言つた因果かは知らないが、演算ユニットの有する自己保存機能が働いたとやらで、俺と言う形を持つ生体演算ユニットとして再誕したのだ。

まあ、蛇足なのだが、遺跡に取り込まれた際、何か金眼の幼女に色々愚痴られたような記憶がある。三千世界でバッドエンドを迎えるテンカワを助けたいとか、助けたらその結果自ら（演算ユニット）を破壊されそうになり、その防衛活動として自動的に起動した防衛機構でテンカワを潰しちゃう事幾星霜、過去に飛ばせば心が磨耗してつぶれて、別人に移せばどちらにしろ因果に巻き込まれ、しかもやっぱり結果的に演算装置を壊そうとするか何等かの悪影響を及ぼそうとするものだから、今回の歴史では予め破壊されても転移シス

テムに欠陥が出ない様、バックアップを作成する、という行動に出るという選択が採択されたらしい。

因みにこれら平行世界の情報や、バックアップ作成の採択などは次元連結システムのちょっとした応用で演算ユニット同士で決めたらしい。いいのだろうかそれ。

まあ如何言う事かと要約すると、今の俺は、俺と言つ意志を持ち、その意志の元で火星の演算ユニットと同等の演算能力を持つという一種のモンスターに成つたらしい。

正直、やらかした。つまり今の俺は、何の制約も無く、ボソンジヤンプを駆使し、それどころか単身でディストーションフィールドを張ることすら可能で、更にマシンチャイルドを上回る演算能力を常備しているらしい。その上遺跡の演算ユニットとは完全に乖離した存在であるが為、遺跡演算ユニットに依存することなくボソンジヤンプが可能であるのに、同じ演算ユニットという特性上、遺跡の演算ユニットで行われるボソンジヤンプに干渉が可能、とか。

なんだろうか、この「ぼくのかんがえたさいきょうしゅじんこう」ではなくったのだけれども みたいな設定は、正直、人の身である俺には、この能力は些か過分すぎる。

しかも何だ。肉体は最盛期までは成長し、最盛期に至つた時点での状態を常に維持し続ける？

つまり二十歳くらいで老化が止まつて不老、と？

……厨一臭いなあ。然し、文句は言えない。何せ最悪の場合、俺はあのまま収集データの一つとして遺跡に取り込まれて、其処で終わつてしまっていたかもしれないのだ。どうやら俺の再誕には古代の火星の人の介在も有つたらしい。生きている事を喜びこそすれど、文句を言つのは些か見当違いだろう。あと、遺跡からテンカワの援護要請を頼まれたような気がする。原作介入時には100歳前後かあ……。

まあ、いい。その事は後回しだ。肝心の遺跡演算ユニットがどうなつたか、と言う話。

どうもあの演算ユニット、私の意志を感じて身の危険を感じたか、それともただの偶然か、私をボソンジャンプで自宅へと送り返した後、如何やってか自ら何かをやらかして、氷の下へともぐりこんだらしい。

と言つのは、今朝方自宅の自室のベッドの上で目覚めた私が、色々パークになつて、少し落ち着いた後、今度は父君がなにやら慌てだしたのだ。

で、何時ものように話を盗み聞きしたといふ、極冠のほうでなにやら不明瞭な熱源が観測されたのだ、とか。

その時点で一息ついていた私は、自らの能力把握の一環として、ボソンジャンプで昨日火星の演算ユニットが露出していた地点へとボソンジャンプを敢行した。当然、第三者に見られた場合を考え、全身を白いシーツで覆つて。

で、ジャンプした結果、昨日まで其処に露出していた筈の遺跡演算ユニットは何処にも見当たらず、ただ真新しい氷がはる大地があるだけだった。

「其処の貴様！ 何故こんな場所に居る……！」

で、其処に佇んで呆然と地面を見ていたら、突如背後からそんな声が掛かつた。慌てて振り向くと、どうやら調査に来た部隊の先遣隊らしい。

白い大地の上で白いシーツを被つてゐるのに何で気付けるんだろうか。やっぱり宇宙に出た人類はNT覚醒するんだろうか？

等と下らない事を考えてしまう程度に慌て、再び自宅自室へとボソンジャンプ。先遣隊の彼には、私が突如消えたかのよう見えるだろつ。

まあ、まだボソンジャンプのボの字も無いような時代だ。彼一人が騒いだところで、何かの見間違い、で済む……済めばいいなあ。

とりあえず俺は何時も通り、ただの幼女を装いながら日常生活に復帰することにした。

暫くの間、父上殿の周りでは矢張り俺の行動の影響か少し騒がしくなりはした様子だったが、まあだからといってこの緊張時に幽靈騒ぎに大人数を裂くわけにもいかない。

然し、コレがもしかすると連邦のスパイの目撃談かもしれない、という事で暫くの間警邏を強化するとか何とか。まあ、治安の向上はいいことだし？

で、俺は何をしているのかと言つと、今後を見据えて色々と小細工をば。

と言つわけで、結局始末する事叶わなかつた遺跡だが、まあ氷の奥に沈んでいった以上、そう簡単には干渉も出来まい。結果としては、俺が痛々しいチートオリ主化しただけで終わつてしまつた。

「　ん？」

とか、思つていたらなにやら不意に背筋が粟立つた。
何処かで何か巨大なエネルギーが爆ぜ、同時に数十万の命が消し飛んだような、そんな間隔。我ながら厭に具体的に思い浮かぶその感覚。これは　多分、間違いなく、核なのだろう。

突如として消え去つた幾万の命の空白に少し気分が悪くなる。

「あら、吹雪、どうかしたの？」

「　……おかあさん、避難しよ」

言いつつ、手早く鞄を取り出し、必需品を纏めて背負う。幼女の必需品など数が知れているので即座に用意は整つ。次いで、戸惑う母親の代わりに手早く荷物を纏める。衣類下着一式と、医薬品に保存食に……あああ、いかん、この後の事を考へるとどうしても憂鬱に為る！　誰がこの後苦難の放浪が始まると解つてはいるのに嬉々としていられるのかつ！！

と、どうやら俺の必死の様子からただ事ではないと理解してくれたらしい母は、私の横に並んで身支度の準備を始めた。

というか、さすが御母堂。幼女な俺の手際よりもよつほど手早

く荷物の準備を進めていく。

なら、私も少し自分用のお仕事を進めさせてもらひつとしよ。

部屋の一角に置かれた端末　　俺の自作の端末で、簡易IFSとでも言おうコレは、生体演算装置である俺にしか使えない、低性能なIFS端末だ。何せこの時代、まだIFSとか普及していないからなあ……。

コードむき出しの機械類、その中でも銅線がむき出しの一角に両手を突つ込み、システムを掌握する。この家のLAN、次いでこの区画のネットワーク、次いで火星全域、火星衛星帯　　と来たところで、漸く目的の映像が得られた。火星本星の陰から薄らと見える爆炎。それは、間違いなく戦争の光だ。

どうもこちらの避難を遅らせる為か、地球連邦は此方の情報網を麻痺させて、一つ一つ確実に此方を消し飛ばす心算らしい。

慌ててその情報を各火星軍に散布。3分ほどして火星全域に避難警報が流された。

さて、いよいよ火星脱出なのだけれども……はあ。

私も、火星の演算ユニットのコピーを得てから、色々と手を打つておいた。火星独立軍部の情報に情報操作を行い、予め避難船の準備をさせて置いたりとか、食料の積み込みだとか。

……いつそのこと、軍用の補給艦の一隻でも奪取して、資源移送用にでも利用するか？

ふむ、咄嗟に思い浮かんだにしては、中々いい案のように思えてきた。幸い此方にはIFSモードキがある。この時代の戦艦のセキュリティーくらいなら、軽く突破できるだろう。

と言うわけで、早速連邦軍のシステムに火星の警戒衛星網を経由してハッキング。というか、このまま電子掌握すれば此処で話は終わるんじやないか？　なんて一瞬考えただけれども、どうにもシステム自体が古すぎて、電子掌握した程度では收まりそうにも無い。何せ相手は手動でミサイル一発放てばいいだけなのだ。射線なんて、惑星が自ら自転しているのだ。懲々自分から射線をそろえる必要は

無いだろ？」

という事で、ハッキングして、まだ殆ど物資を使つていない後方の補給艦を一隻完全に掌握する。矢張り古すぎるシステムで、完全に掌握するのには手間が掛かる。

危うくシステムを取り戻されるところだつたが、何とか艦に設置されていた対艦内用鎮圧システムを作動させ、艦内の人間を強制的に鎮圧。その後艦内にジャンプし、艦内で鎮圧されている連邦軍の皆様を強制ジャンプで掃除した。まあ、演算ユニットの影響を受けているわけでも、IFSによるイメージング補正を受けているわけでもないので、まともにジャンプできるとは思わないが……元々火星に核を打ち込むような連中だ。胸は痛まん。

準備が時点でウチのシャトルに乗つて火星を離脱。ウチつてなんだか割りと良い家計らしく、プライベートなシャトルを持つていたりするらしい。母の操縦で大気圏を離脱し、軌道上に待機している火星軍の難民船へと合流しようとする母だつたが、ソレを一先ず抑える。何せ此処から艦隊に合流しようと思うと、一番近いのは艦隊のど真ん中を突つ切るコースなのだ。では遠回りすれば良いのだが、残念ながらこの民間用シャトルに其処までの性能は無い。大気圏を個人で離脱するだけでも、精一杯の高級品なのだ。

と言つわけで、乗つ取つてこつそりと戦列から離れさせた補給艦の敵味方識別信号を民間の物へと書き換えて、母の操縦するシャトルにガイドビーコンを発信させる。

当然母はそんなものを気に止める心算もなかつたらしいのだが、私の説得により何とか補給艦へと向かうルートを選んでくれた。

で、目の当たりにした補給艦は連邦軍の物。当然母は慌てて引き返そうとしたものの、アレは既に此方が掌握しているから大丈夫、などと説得して乗艦。

母は半信半疑ながらも、どうやら本当にこの船が無人艦であるという事を確認した瞬間、一体如何やってこんな事をしたのか、と氣勢良く此方に問い合わせてきた。ハッキングして隔壁を開放したまま外

部ハッチを全て開放してやつただけ、と答えたたら、母は若干顔色を悪くしていた。で、「その事は他の誰にも喋っちゃ駄目よ?」と。まあ、誰にも言つつもりはありませんが。

そういうしている内に、補給艦の艦橋にたどり着いた。うーん、古い。

持ち込んだISFモドキを設置して、一応俺一人でも操縦できるよう改修してみるけど……うーん、完全掌握には少し時間が掛かるかな? 電子系と機械系が完全に同期していない。やはり元のシステムが古すぎて、ワンマンオペレーションは無理の様だ。

それでもまあ、操舵を行うには十分だろう。

とりあえず格納庫に積まれていた無人船外作業ロボに指示を出し、艦体のカラーリングを変更するように命じる。とりあえず、黄色と黒で作業用っぽいカラーリングに。で、艦自体の敵味方識別信号は、元々乗っていたシャトルの物に変更して、漸くこの段階で火星軍の難民船へ向けて移動を開始した。

まあ、補給艦と言う性質上、移動に掛かるコストはかなり低い。口
しなら、まあ、火星までなんとかたどり着ける……かな?

02 厨一病的チート超人幼女爆誕（後書き）

改行してないから読み辛い……。
後で推敲するかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5721x/>

チートオリ主のナデシコ生活

2011年10月18日22時02分発行